

富良野の異形屋根 THE DEFORMED ROOF HOUSE OF FURANO



建物名称 / 富良野の異形屋根
所在地 / 富良野市
主要用途 / 専任住宅
家族構成 / 親夫婦、子夫婦

構造・技法
主体構造・技法 / 木造在来工法
基礎 / 布基礎

規模
階数 / 地上2階
軒高 / 9700mm 最高高さ8000mm
敷地面積 / 不明 (とても大きい)
建築面積 / 96.47m²
延床面積 / 185.89m²
1階 / 96.47m²
2階 / 89.42m²
ロフト層 (屋根不算入) / 17.39m²

工程
設計期間 / 2017年8月~2017年11月
工事期間 / 2017年12月~2018年4月
敷地条件 /
地域地区 / 無指定地域

改修は1階を親世代、2階を子世代とし、必要所室を満足させるためには増築の必要があった。断熱改修と構造補強のためスケルトンまで解体し、異形屋根形態をトレスして妻側に半屋外空間を建て増した。増築部分は親子世帯を緩やかに繋げ、テラス、風除室、アクセス空間などの機能を兼ね備える。農家に不可欠な土間でもあり、職と住を横断する空間ともなっている。地域では馴染み深い農業ハウスの印象を重ね合わせたこの半屋外空間は、建築コストを抑えつつ、温室的環境特性によって厳しい冬にでも太陽光から熱を作り出すことができる。それゆえ、この地域に即した新しい環境デザインとしての側面も持つことになった。増築部の構造は105x180@1820で柱が立ち、耐風圧を柱の長手方向で受けることで構架材をなくす。決定された構造デザインに(ある意味強引に)プランを重ね合わせることでテラスや開口にズレが生じ、アップグレードされたマニエリスティックな構架が建ち現れた。現在、この家にはぬいぐるみや様々なもので溢れかえり異形の家に負けない力強い生活感にみまがっている。

富良野の異形屋根～北海道民家のマニエリスム

1974年に建てられた農家住宅を二世帯にリノベーションする計画である。異形屋根と称するこのような住宅は、北海道では馴染み深いとも言え難く、道外では見たことがない。それらアノニマスな民家は北海道

建築の奇想、マニエリスムと言っても過言ではない。(右下の考察を参照) 今まで注目されなかった北海道民家のエアポケットに光をあて、それを次の世代に継承していくことが計画のベースとなった。



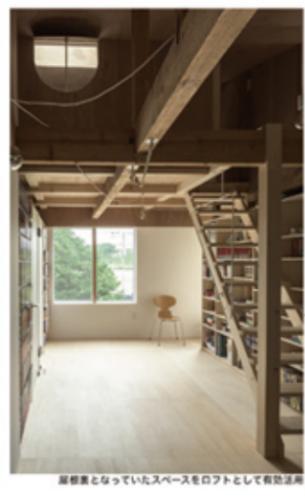
ポリカーボネイトパネルと樹脂ワッシュで構成される、既存異形屋根をトレスした外観



冬の外観



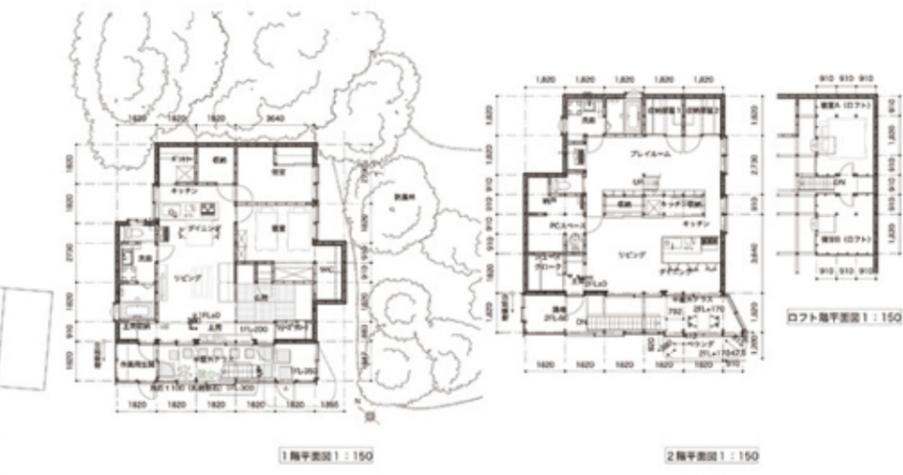
2階DKは半屋外テラスからバルコニーへとレイヤー状に昇部へと変化する。窓の開け閉めで環境を緩やかにコントロールできる



1階リビング、土間、半屋外テラス、アプローチ外装、自分の庭。道整の大自然の露に室内から外へレイヤーに変化

古い構造と過去の改修、そして今回の補強。3世代にわたって改修を繰り返しながら住み継がれた家の歴史を可視化

新築家となっていたスペースをロフトとして有効活用



1階平面図 1:150

2階平面図 1:150

ロフト平面図 1:150



南西向き半屋外テラス。冬は外気温が20℃に達するほどだが、晴天の日半屋外テラスが35℃を超える。その温かい空気を部屋に取り込むことで、晴天の日ほとんどトップを奪わない日もある。一方夏場は大雨を避けることで換気を促し、半屋外テラスを壁外と同じ程度の気候とすることができる。数多くある大雨を避け開けることで室内環境をエコにコントロールすることができる。

北海道における屋根形状の変遷とその考察

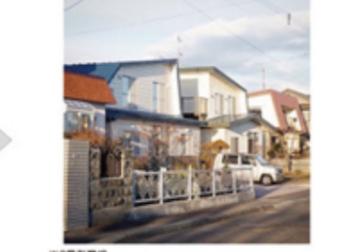
北海道近代民家史を簡単に振り返ると1950-60年代に三角屋根(※1)の様式が確立し、後を受けた異形屋根(※2)の様式は60年代から10年ほど続いた。異形屋根様式が発生した理由について調べると、事件現場より多く、多くの懸念品が散らばっていた。一例には板金技術の向上である。それが異形屋根を作りえる一つのベースであった事は確かだが、様式変化の本質的理由とは言えない。そして他の懸念品からも、それにたどり着くことはできなかった。果たして、この様式変化の原因は何なのか？もっと俯瞰して人類史の視座で考えてみる事にする。例えばルネサンスのような「自立した様式」ではなく、「それからのズレとして定義される概念」であるマニエリスムだとすると整理がつくのではないか。そしてそれは人類が歴史的に繰り返す概念でもある。近代でいうモダンとポストモダンの関係の様に、三角屋根から異形屋根に至る様式の推進力をマニエリスムであると位置づけることは、それほど乱暴な話ではない。つまり異形屋根は北海道民家史におけるマニエリスムと言えるのではないか。

三角屋根の時代の街並み



※1三角屋根
コンクリートブロック構造でリビングが中心にあり下階のない平面。屋根は木造で雨勾配の緩急を調整しやすくしているのが特徴で、その背景には1953年に制定された「北海道防凍害住宅建築等促進法(凍害法)」がある。法に反することで四角状となった住宅は、敷地中央に位置され、均質に区画された分譲地帯に美しくリズムを刻む存在を形成した。

異形屋根の時代の街並み



※2異形屋根
木造で屋根は板金で覆われている。三角屋根から様式化した背景には、凍害法の厳格化が木造住宅へ広がり設計が自由になったこと、板金技術の向上で様々な屋根形状を作ることが可能になったことがある。しかし雪の重さとして合理性が高いことなど、このデザインの推進力が三角屋根様式の技術改修であることを明確に言いだすことはできない。

様々なタイプの異形屋根

